

本日の活動

- ① 市民会館の健康管理と診察
- ② 市役所救護所の診察

活動初日は朝 615 出発で、車で1時間程の気仙沼の市民会館まで向かいました。旭川医大は現在市民会館を定点の診療拠点としています。気仙沼を目前にして運転中に車が大きく揺れ、震度4の余震がありました。津波警報も出ましたがすぐに解除されました。市民会館には成人と高齢者を中心に 250 名程度の市民が避難しています。中には3名ほど、寝たきりに近い患者さんもおられます。

大広間に雑魚寝状態の他、廊下に布団を縦列して一日を過ごす方もおられます。

施設の1階には仮の診察所を作成して診療します。

今日は施設内の避難者のべ 25 名の診察をしました。主に呼吸器系、特に咳の訴えが多く、咳が周囲の安眠を妨げる不安因子となっている様子がありました。

外来診療介助を対応した菊池看護師は、避難所では薬物の投与が短期間(3日が目安)のため、そのときの在庫状況で製剤が変わり、内服を正しく守れない現状を感じました。

(アダラート CR20mg 1T1X 処方、次の在庫によってはアダラート L10 2T2X とせざるをえず、3日おきにくるころ変わる)

患者さんの中には発災当日、薬をもらいに薬局にいるときに被災し、インスリンをもらえずに2週間過ごして体調不良を訴え、血糖”Hi”に至っている人もいました。

森田薬剤師は診察室わきに積み上げられた処方された薬物を選び、手書きでお薬袋を作成し、手渡す際に注意事項を伝えていました。大学の薬剤部では手書きはもうないのですが、以前ローテーションしていた地方病院の状況を思い出したそうです。また、薬剤師は貴重な存在で、外殻のない裸の薬品の特定をはじめ、他の診療所の医師からもお薬に関するコンサルトを受けたいという希望が多いようです。





安田看護師は外来の介助の他、施設内の方々の健康状態の見回りを行いました。施設内の保清の推進が必要なことを痛感していますが、避難所内は必ずしも暖かくもなく、高齢者が衣服を脱いで保清をしたがらないことも背景にあるのではないかと指摘しました。

石関医師と村上看護師は本日市役所の診療所で25人程度の診察を担当しました。市役所職員自身が被災者であり、すでに不眠不休で疲労困憊し、風邪などで体調を崩している人も多かったため、各部署にまわり、薬を配布して回りました。これからの問題は肺炎の管理。風邪にPL処方などの対症療法ですますだけでは限界にきており、肺炎を見つけ出して治療をする必要があるとの考えです。実際に昨日は近隣の市立病院に20名程度の肺炎患者が入院となりました。石関先生は専門知識を生かして、易感染性がベースにあるDM患者を見つけ出して適正に管理することでも肺炎の軽減に有用ではないか、施設で何らかの対応策をとっていききたいとのことでした。また、本部としても避難所での肺炎診療ガイドラインを作成予定で、肺炎の治療を避難所レベルで早急に介入して対応していく方向性を打ち出しました。

村上看護師は他にも発災後初めての眼科医師による専門外来に立ち会いました。被災後に点眼薬を流された人、コンタクトなく過ごしている方などが多数おられたようで、専門医のニーズも多かったようです。

出崎医療支援係員は派遣スタッフの医療活動が円滑に行われるように、衣食住の確保や、必要な医療資材の確保、給油待ちで渋滞する中、車両のガソリンを補給しに行くなど大学では経験しないようなバラエティー豊かな仕事を行ってくれました。明日はみんなの水の他、輪ゴムや買い出しに行ってくれるそうです。

全員、不安と緊張の中、無事に初日の任務を完了しましたことを報告致します。